

伏せられていたのだ。

こっちをしっかり向く者でもないではない。しかしそうしたことはまれで、たいていの女子は恥ずかしそうにうつむいている。百九十センチに近い鉄には、声をかけてくる女子はみんな、頭頂部と肩しか見えない生物だ。

髪分け目を見ているくらいなら、空を見ていたほうがいい。こうしたことも、もう五年近くなるから、季節ごとうつろう空の様子にも詳しくなった。

彼女の言い分を一通り聞いて、いつもと同じ断りを入れる。背負ったベースにも負けない低い声が響く。

「ごめんな」

理由は言わない。

好きな人がいるのと聞かれればそうだとわずき、私じやダメですかと問われたら今は音楽のことで頭がいっぱいなんだと答える。どっちも間違いではないから、鉄の顔は真剣だ。

泣きながらとぼとぼと去っていく後ろ姿を見ていると、公園に見知った人を見つけた。

目が合う。

中学で同級だった吉井遥人だ。頼りなげに上げた手には絵筆を持っている。ベンチに腰かけ、膝に画板を乗せている。見た目は中学生のときと変わらない。会うたびに、少しずつ背が伸びているように思えるが、鉄に比べれば小さ

い部類に入る。

鉄は公園から中学生が去ったのを確かめて遥人に近づいた。先に声をかけたのは遥人だ。

「見てごめん。どっか行こうかと思ったんだけど」

「いいんだよ。よくあることだし」

「鉄はもてるからね。にしても、大変だ」

「そうだな。慣れるもんじゃないな。今日みたいに不意をつかれると、余計にな」

「誰かときあっちゃえばいいのに」

「やだよ。よく知らない人間と」

「つきあって知っていくんだよ」

「それに俺、好きな人いるし」

「初耳」

あははと笑う遥人に、鉄はつられて力なく笑う。

遥人は色が白くて目が鶯色だ。一年中外で絵を描いているくせに日焼けしないで、赤くなって白くなってを繰り返す。鉄とは対照的だ。

鉄は小学生まではサッカーをやっていた。足を悪くしてグラウンドを離れてから、もう四年経つのに、色の黒いはなおらない。中学では学生服の色と区別がつかないと笑われた。だから、高校はブレザーの葦矢工業にしたほどだった。

ベンチの目の前には、若い銀杏の木が生えていて、遥人